



Title	高齢食道がん患者の術前化学療法によるQOLの変化
Author(s)	嵩田, 理佳
Citation	大阪大学, 2022, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/87929
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 ＜a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed >大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (畠田 理佳)

論文題名 高齢食道がん患者の術前化学療法によるQOLの変化

【背景】食道がん患者の多くは治療開始前から症状に伴う苦痛を感じ、さらには栄養状態が低下して悪液質の状態にある。特に高齢の患者は諸機能が低下しているが、術前化学療法の高齢食道がん患者への影響は不明である。

【研究目的】高齢食道がん患者の術前化学療法によるQOLへの影響を明らかにする。

【研究方法】大阪大学大学院医学部附属病院にて胸部食道がん手術の術前化学療法を受けた65歳以上の患者を対象とした。対象者にEORT CQLQ-C30日本語版（身体・精神・社会・役割・認知など機能関連17項目と、症状関連13項目を下位尺度とする合計30項目）、EORTC QLQ-OES 18日本語版（食道がん特異的尺度18項目）、CGA (Comprehensive geriatric assessment)日本語版（高齢者総合機能評価25項目）、G8 (G-8 geriatric screening tool)日本語版（高齢者機能評価8項目）で構成された自記式調査票を用いて、化学療法前と化学療法後に調査を実施した。分析は基本的統計処理後、各QOLスコアとG8の経時的な変化について、Wilcoxon符号付順位検定を用いて検討し、有意水準は5%に設定した。本研究は、大阪大学医学部附属病院の倫理委員会の承認を得て実施し、対象者には口頭及び文書にて研究の目的、内容、方法、個人情報保護等に関して説明し、同意を得た。

【結果】36名（男性32名、女性4名、平均年齢71.6± 5.1歳）が分析対象となった。QLQ-C30の機能尺度では、心理的機能のみ化学療法前より化学療法後の得点が上昇した（80.3 vs. 86.6, $p = 0.030$ ）。他の機能の得点は化学療法後に低下しており、身体機能は有意に低下した（96.7 vs. 93.5, $p = 0.021$ ）。OES-18では、嚥下障害、唾液の嚥下困難、むせ、食事摂取困難、逆流症状、および疼痛は有意な得点の低下を認めた（29.6 vs. 19.4, $p = 0.014$; 9.3 vs. 4.6, $p = 0.034$; 18.5 vs. 11.1, $p = 0.033$; 26.6 vs. 17.6, $p = 0.022$; 12.5 vs. 6.9, $p = 0.026$; 10.8 vs. 4.3, $p = 0.016$ ）。G8の平均得点は化学療法前11.7から化学療法後は10.7（ $p = .022$ ）に低下し、同世代と比べた自分の健康状態を「良くない」と回答した人は、化学療法前5名に対して化学療法後は11名に増加した。

【考察】術前化学療法後は身体的な機能低下がみられ、患者も体力や健康レベルの低下を自覚していたことから、化学療法開始前から栄養管理や運動療法などによる身体機能の維持を積極的に行う必要性が示唆された。食道がんの症状は軽快したが、化学療法の有害事象に関する症状は残存するため、化学療法中から症状コントロールによる苦痛緩和を行うことにより、症状に関連するQOLはより向上することが期待できる。化学療法後に心理的機能が改善したのは、多くの症状が改善したことを患者が実感し、手術に向けて一つの山を越えたと感じたこと、また、入院中に医師や看護師らとコミュニケーションをとることにより、心理的な安定がみられたからと考える。

【結論】術前化学療法によって、身体、役割、認知、社会的な面のQOLは低下したが、食道がんの症状は多くが軽快し、心理面のQOLは改善した。よりよい状態で手術に臨むことができるように、術前化学療法前からリスクアセスメントを行い、症状コントロールを含む身体機能を維持する関りや、より心理面を安定させるための情報提供と精神的サポートを実践していく必要があることが示唆された。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (寫 田 理 佳)			
論文審査担当者	(職)		氏 名
	主 査	教授	上野 高義
	副 査	教授	荒尾 晴恵
	副 査	教授	遠藤 誠之

論文審査の結果の要旨

食道がん患者の多くは治療開始前から症状に伴う苦痛を感じ、悪液質の状態にある。最近では食道がん術前化学療法導入が盛んにおこなわれているが、術前化学療法の高齢食道がん患者への影響は不明であることから、高齢食道がん患者の術前化学療法によるQOLへの影響を明らかにすることを目的とし本研究を行った。

【研究方法】胸部食道がん手術の術前化学療法を受けた65歳以上の患者を対象とし、EORTCQLQ-C30日本語版（身体・精神・社会・役割・認知など機能関連17項目と、症状関連13項目を下位尺度とする合計30項目）、EORTC QLQ-OES 18日本語版（食道がん特異的尺度18項目）、CGA（Comprehensive geriatric assessment）日本語版（高齢者総合機能評価25項目）、G8（G-8 geriatric screening tool）日本語版（高齢者機能評価8項目）で構成された自記式調査票を用いて、化学療法前と化学療法後に調査を実施した。分析は基本的統計処理後、各QOLスコアとG8の経時的な変化について、Wilcoxon符号付順位検定を用いて検討し、有意水準は5%に設定した。

【結果】36名（男性32名、女性4名、平均年齢71.6± 5.1歳）が分析対象となった。QLQ-C 30の機能尺度では、心理的機能のみ療法前より療法後の得点が上昇した（80.3 vs. 86.6, $p = 0.030$ ）。他の機能の得点は化学療法後に低下しており、身体機能は有意に低下した（96.7 vs. 93.5, $p = 0.021$ ）。OES-18では、嚥下障害、唾液の嚥下困難、むせ、食事摂取困難、逆流症状、および疼痛は有意な得点の低下を認め症状が改善した（29.6 vs. 19.4, $p = 0.014$; 9.3 vs. 4.6, $p = 0.034$; 18.5 vs. 11.1, $p = 0.033$; 26.6 vs. 17.6, $p = 0.022$; 12.5 vs. 6.9, $p = 0.026$; 10.8 vs. 4.3, $p = 0.016$ ）。G8の平均得点は化学療法前11.7から化学療法後は10.7（ $p = .022$ ）に低下したが、機能障害のある患者の割合は化学療法前13人から化学療法後は7人に減少していた。この結果から、術前化学療法後は食道がんの症状は軽快するが、身体的な機能が低下し、有害事象に関する症状は残存するため、化学療法中から症状マネジメントを含む緩和ケアを行う必要がある。化学療法後に心理的機能が改善したのは、多くの症状が改善したことにより、患者が治療効果を実感したこと、また、入院中に医師や看護師らとコミュニケーションをとることにより、心理的な安定がみられたからと考える。一方で入院治療による体力や健康レベルの低下も自覚しており、治療開始前から体力維持を積極的に行う必要性が示唆された。

【結論】高齢食道がん患者は術前化学療法による治療効果を実感する一方で、体力や健康レベルの低下を感じていた。よりよい状態で手術に臨むことができるように体力維持が必要であり、症状マネジメントを含む身体機能を維持する関りが求められる。また、心理的な安定のために、情報提供と精神的なサポートを行うことも必要である。

本研究成果は、これまでエビデンスの少なかった高齢者に対する食道がん術前化学療法の影響を明らかにし、看護介入法立案の一助となる考察をえた。以上より、これからスタンダードになるであろう、高齢者食道がんに対する術前化学療法に対する看護介入のアプローチ法の確立において非常に示唆に富む内容であり、今後の看護実践能力の向上に向けた取り組みが期待できることから、本研究は、博士の学位に値すると評価できる。